

身体の詩学と革新性 —— ジョン・キーツの詩における詩的昇華／消化の美学*

Poetics of Physicality and Rebellion: Poetic Sublimation / Digestion in Keats's Poetry

後藤 美映

Mie GOTOH

英語教育ユニット

(令和元年9月24日受付, 令和元年12月12日受理)

1835年, Leigh Huntは自身が編集主幹であった文芸雑誌『ロンドン・ジャーナル』(*London Journal*)の中で, John Keatsの*The Eve of St Agnes*を賞賛する際に, “Lucent syrups, tinct with cinnamon”の一節を取り上げている(Matthews 280)。これは物語詩の第30連において, 眠るMadelineの傍らで, Porphyroが異国からの嗜好品を取り混ぜたご馳走を皿の上に盛る場面からの引用である。

While he from forth the closet brought a heap
Of candied apple, quince, and plum, and gourd;
With jellies soother than the creamy curd,
And lucent syrups, tinct with cinnamon;
Manna and dates, in argosy transferr'd
From Fez; and spiced dainties, every one,

From silken Samarcand to cedar'd Lebanon. (264-70)

食べ物を具体的に描出するこの詩行が, 近現代の批評においては, 中世ロマンスに相応しい舞台を用意するとみなされ, そこでマデラインとポーフィロの愛がいかにか成就するかが議論されてきた(Kelley178-79; Graham-Campbell 43)。しかし, 興味深いことは, 当時, リイ・ハントはこの詩行を, 「繊細な音の抑揚と実に洗練された美食家が持つ知覚的精妙さが存する」(“Here is delicate modulation, and super-refined epicurean nicety!”)と評したことである(Matthews 280)。ハントは, 「シナモンを染み込ませた, 半透明のシロップ」を比喩として解釈するというよりもむしろ, 食べ物そのものとして捉え, 言葉の聴覚的繊細さに加え, その食べ物を選別し, 志向するキーツの味覚の精妙さを評価したのである。キーツに与えられたこの「美食家」“epicurean”という名こそ, キーツの詩作を解釈する大きな鍵となる。実際, キーツは詩の中で多くの物を食べて飲む美食家の詩人であり, palate(口蓋)といった顕著な身体性を表現する詩人である。

例えば, “Ode to a Nightingale”や“Ode on Melancholy”にみるように, 阿片やワインといったものを口にすることや「喜びの葡萄」(“Joy's grape”)を「繊細な口蓋」(“palate fine”)ではじけさせるといった行為を通して(“Melancholy” 28), 味覚の妙味が強く意識させられる詩行は, キーツの創造性を語る上で重要な鍵となる。あるいは, “La Belle Dame sans Merci”や*Lamia*においても, 人間界と異界, すなわち現実と想像の世界の狭間は, 味覚を通して呈示されることになる。例えば, 妖精は騎士に「甘い草の根, そして野生の蜂蜜と甘露」(“roots of relish sweet, / And honey wild, and manna dew”)を差し出し, 騎士は悦楽の世界を味わう(“La Belle Dame” 25-26)。村人は, レイミアの館で供されたワインに興じ, “merry wine, sweet wine, / Will make Elysian shades not too fair, too divine.”と酔い痴れ(*Lamia* 2.211-12), 幻想の饗宴は, 味覚を通して経験されることになる。このように, キーツの詩は, 味覚的イメージによって, 身体的

快樂や欲望を表現し、さらに味覚の作用が、人間の主体と外界とを繋ぐ接点となって、いかに想像力を刺激し、世界を表現する言葉が紡ぎ出されるかを模索するといえる。

しかし、味覚に代表されるような感覚的なキーツの詩は、当時保守派の文芸批評誌からは、言葉の技巧に走り、詩的着想において未熟であるとされ、卑俗な詩作であると酷評されることが多かった。例えば1820年文芸批評誌『ブリティッシュ・クリティック』(*British Critic*)は、キーツと同様の美学的趣味の持ち主であるハントを師と仰ぐというまさにその理由において、物語詩 *Endymion* は悪趣味であるとみなした。しかし、注目すべきは、その際にキーツの詩が、悪趣味であることを、皮肉にも食べ物の比喻で評することである。

The effect of this [Hunt's advice] upon Mr Keats's poetry, was like an infusion of ipecacuanha powder in a dish of marmalade. It created such a sickness and nausea, that the mind felt little inclination to analyse the mixture produced, and to consider, whether after all, the dose might not have been mixed with some ingredients that were in themselves agreeable. (Matthews 228)

『ブリティッシュ・クリティック』は、キーツの詩作にハントが悪影響を与えていることを示すために、マーマレードに下剤が加えられ、病気と吐き気という消化不良が引き起こされたという味覚のメタファーを使用して、悪趣味 (bad taste) であることを表現している。そもそも taste という語は、身体性を排除した文学的、美学的「趣味」を表現する一方で、「味覚」という味わいや、食べ物を食べるという身体的働きや食欲といった欲望を表現する語である。すなわち、高尚な趣味を問うべき文芸批評において、趣味の欠落したキーツの詩を評するために、敢えて、食べ物を味わうという行為によって象徴される形而下の物質性と消化不良の身体性をメタファーとして使用しているのである。

このように、19世紀初頭のロマン派の時代において、taste という語は、味覚と美学的趣味という意味の両義性によって、文学的文化的に重要な機能を担っていたのである。したがって、キーツの詩作における味覚的イメージを考察することは、ひいてはキーツの詩の美学的趣味について考察することにほかならない。本論では特に、当時保守的な文芸批評雑誌が掲げる、時代を主導する美学的趣味を明らかにし、その美学的規範から逸脱すると批判されたキーツ独自の趣味に焦点をあてることによって、逆説的にキーツの詩がいかに詩的革新性を孕んでいるかについて論じる。すなわち、キーツの詩作における味覚 (taste) と消化 (digestion) に対して、洗練された趣味 (taste) と昇華 (sublimation) とが対抗関係であった美学の歴史的変遷を背景に、キーツの詩が革新性を担っていたことを論じる。

I

19世紀初頭に taste という語が担った意味合いは、18世紀における taste についての議論を通して形成されることになる。例えば、1712年の *The Spectator* (No. 409) 誌上で Joseph Addison が、趣味について語るように、18世紀は趣味論の世紀ともいえる時代であった (Gigante 47-60)。

Most Languages make use of this Metaphor [the metaphor of taste], to express that Faculty of the Mind, which distinguishes all the most concealed Faults and nicest Perfections in Writing. We may be sure this Metaphor would not have been so general in all Tongues, had there not been a very great Conformity between that Mental Taste, which is the Subject of this Paper, and that Sensitive Taste which gives us a Relish of every different Flavour that affects the Palate. (495)

アディソンが述べるように、taste という語は、作品の美点と欠点とを見極める判断力としての「知的能力」(Faculty of the Mind) と、口蓋に刺激を与える様々な味を味わう味覚としての「感覚的能力」(Sensitive Taste) の二重の意味合いを持っている。この二重の意味合いが taste という語において「一致」(Conformity) することによって、taste の比喻がさまざまな言語の中で多様に機能することになるのである。そしてこの二つの意味のうち、特に判別能力である判断力のみを抽象していったのが、18世紀の美学的趣味論である。問題は、味覚は万人において千差万別であり、その一般的規則を議論するのは無益であると同様に、趣味についても一般的かつ確立した原理を打ち立てることは難しいと考えられることである。しかし、アディソンと同様に David Hume も「趣味の基準について」(Of the Standard of Taste) において、「趣味のあらゆる多様性と気まぐれの中であって」、美を「快樂」として、不完全さを「嫌悪」として判別する一般的原理が存在すると主張する。

It appears then, that, amidst all the variety and caprice of taste, there are certain general principles of approbation or blame, whose influence a careful eye may trace in all operations of the mind. Some particular forms or qualities, from the original structure of the internal fabric, are calculated to please, and others to displease; (201)

趣味における「目利き」(“a careful eye”)ならば、「賞賛」と「非難」についての一般的原理が作用するさまを見極められるかもしれないとヒュームは述べている。すなわち、趣味判断において、ある特定の性質のものは、人を喜ばせたり、不快にさせたりするようにできているのであり、そこに普遍性が存在するということを論拠として、ヒュームは一般的原則を構築しようとしたのである。このような快、不快の判別能力を判断力として確立するために18世紀の趣味論は展開されたといえる。

しかし、趣味論において重要なことは、アディソンが、こうした趣味の判断力を、「魂の能力」(“Faculty of the Soul”)と呼ぶように(495)、味覚という食欲や満腹感が伴う身体性は美の判断領域から排除されることである。同様のことをAnthony Ashley Cooper, Third Earl of Shaftesburyは、身体性を排除した「上品さ」、「礼儀正しさ」という語句を用いて、若者の趣味を矯正し、養成していくことの重要性を唱える。

Whoever has any impression of what we call gentility or politeness is already so acquainted with the decorum and grace of things that he will readily confess a pleasure and enjoyment in the very survey and contemplation of this kind. Now if in the way of polite pleasure the study and love of beauty be essential, the study and love of symmetry and order, on which beauty depends, must also be essential in the same respect. (414)

良い趣味へと若者を導くためにシャフツベリーが提唱することは、節度ある快楽を身につけることである。若者にとって、美を学び、愛することが肝要であり、そのために美が旨とする均衡と秩序を学び、愛することが重要なのである。すなわち、シャフツベリーは趣味を語るうえで、「礼儀正しい」快楽の勧めを説くことによって、味覚に関わる身体的な飢餓感や、節度を保つことのできない不作法な快楽の要素を最初から排除していくことになる。

このように、18世紀の趣味論は、趣味のよい、礼儀正しい自己を生み出していくことを説き、味覚の身体的、感覚的要素を排除した形而上学的な美の判断力を求めていくことになる。その根底には、個々人の趣味が気まぐれや過剰さへと偏向しないよう、自己の内部に存在する法ともいうべき道徳的判断力が人間には備わっているというイギリス経験主義哲学の考えがあったといえる(Eagleton 43)。すなわち、個々人の直接的経験は人間共通の基盤である感覚を基に成り立ち、黙約的に機能すると前提された感覚は、快や不快の共感覚を備えている。さらにその共感覚は、道徳的判断力を備えており、想像力の働きによって哀れみや同情という共感をもとに社会に秩序をもたらすと考えられた。感覚という共通の社会的基盤(common body)が社会の調和という公共の善(common good)へと通じるのである。ここで重要な点は、共感覚が持つ道徳的判断力は、美を解するという感覚的判断力と同じ地平に置かれていることであり、美を賛美することは社会の秩序を愛することに他ならないということである。したがって、秩序をもたらす礼儀正しい美学的趣味によって保たれる社会において、利己的な抑制の効かない自己を呈示することは忌避されるべきであり、節度ある趣味によって知覚される美の確立とともに、道徳的な善と真を備えた社会は秩序を保つという哲学が成立する。

そして、19世紀のロマン主義の時代において、こうした趣味論は*Blackwood's Edinburgh Magazine*, *Quarterly Review*, *Examiner*といった文芸批評誌を中心にして議論され、趣味の判断基準を裁定していくことが文壇の役目であると自負される時代となる。印刷された活字を消費する読者のtasteは気まぐれで、墮落しがちであり、趣味のよい読者へと導くために、文学や文芸批評が洗練された趣味を大衆に向けて提示するのである。Wordsworthも*Lyrical Ballads*の序文において、個人的で特殊な体験を、繰り返すと内省によって一般化していき、最も規範とすべき趣味を詩作を通して読者に提示していくことを述べている。詩作の目的とは、読者を啓蒙し、趣味を洗練されたものへと高め、読者の感情を改良していくことであると唱えている(Wordsworth and Coleridge 114)。すなわち、19世紀は、趣味の裁定者として、文人や批評家が時代の主潮となる趣味を構築し、提示することをその使命とする時代であったといえる。

しかし、興味深い点は、ロマン主義の時代が美や真実を判別する判断力を18世紀から受け継ぐ一方、消費文化の到来と手を携えて美食学(gastronomy)が登場することを受け、趣味概念から削ぎ落とされてきた味覚の快楽を享受することである(Gigante 166-180)。Jean Anthelme Brillat-Savarin, *Grimod de la*

Reynière といったフランスのガストロノームはもとより、Charles Lamb, リイ・ハントらイギリス・ロマン派の文人達によって、舌と味わいの文化が趣味論と肩を並べることになる。さらに文芸批評の誌上において、食べることや飲むという味覚のメタファーが敢えて修辞として用いられ、趣味の悪さを批判するための手法となされたことも興味深い。すなわち、趣味論を語るうえで、味覚に言及することは、味覚の持つ卑俗さを連想させ、洗練さに欠けることを穿つことに通じるのである。さらにいえば、文壇には味覚のメタファーが横溢し、皮肉にも趣味論を占有する味覚のディスコースの復権という事態を招いた。例えば、1820年 *Monthly Review* は、William Hazlitt の *Political Essays* を批評する際に、保守派の論客に対して辛辣な言葉を並べるハズリットを揶揄するために、味覚の比喩を使用している (Rejack 724-26)。

The taste of the public has, of late years, been accustomed to very high stimulants: no plain wholesome food will go down; and every thing must be hashed and stewed with some “*sauce piquante*,” which, however delicious to one palate, may be very offensive and disgusting to another. Mr. Hazlitt should not cater for such pampered appetites: (Review 256)

ここでは、ハズリットが、刺激的な言葉によって読者を喜ばせることによって、大衆におもねるような文章を書いていると揶揄するために、“*sauce piquante*” という語句を使用している。*Sauce piquante* とは「香辛料を添えた刺激のあるソース」(spicy sauce) という意味であり、大衆を扇動するためにハズリットが使用する刺激的な言葉をこのような味覚の比喩で表現している。すなわち、19世紀初頭の趣味をめぐる言説においては、まさに舌鋒の鋭さをもって批判のレトリックとして機能する味覚のメタファーが使用されるかと思えば、同時に舌の味わいを語るガストロミーの快楽が表現されたといえる。

あるいは、キーツの死後、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』は、次のように、ワインという飲み物の比喩を使って、キーツの詩人としての才能について語る。

Poor Keats! I cannot pass his name without saying that I really think he had some genius about him. I do think he had something that might have ripened into fruit, had he not made such a mumbling work of the buds—something that might have been wine, and tasted like wine, if he had not kept dabbling with his fingers in the vat, and pouring it out and calling lustily for quaffers, before the grounds had time to be settled, or the spirit to be concentrated, or the flavour to be formed. (Matthews 22)

キーツの物語詩を酷評した文芸批評誌は、キーツの才能がワインとして熟成する前に、自らの才能を礼儀を欠く方法で浪費し、成熟させる機を逸したと述べている。特に、詩人が「ワインになったであろう才能」、あるいは「ワインのような味がしたであろう才能」を手にする前に、ワインの樽に指をばちゃばちゃと浸し、腹一杯がぶ飲みするという不作法さを見せたとして揶揄している。その際、趣味の欠如は、“dabbling”, “quaffers” といった語による、食べ物を消費する際の野卑な身体や欲望によって表現され、そうした卑俗さは痛烈な批判のつぶてとなる。

こうした文壇の味覚的メタファーは、活字印刷の拡散という読者層の拡大や、商業主義の興隆に基づく消費社会の兆しを巧みに反映しているといえ、卑俗さや大衆性を強調するといえる。すなわち、美と功利、美と物質が結びつく詩作は、欲望に走る礼儀を欠く身体や卑俗な階級を象徴するという公式を提示することになる。言い換えれば、趣味人とは、市民社会台頭の時代において中産階級が、物質的な豊かさや富において暴走しようとする身体的な欲望を、作法や行儀によって押さえ込み、美学的に礼儀正しい身体を持つとして名乗りを上げたものであったといえる。

しかし、このように洗練された趣味を問う時代にあって、趣味を語るために敢えて味覚の直截的感觉を表現し、飲食物とその消化という身体性を打ち出すという詩作が目指したことは何であったのか? 美学的趣味と、食べ物を味わい消費することを同列に置き、精神と身体の境界を曖昧にする地平には、近代的詩作の革新性が見えてくる。そもそも、五感のうち、敢えて味覚を直截に表現することは、当時すでに西洋の美学的規範に反する創造性を提示していた。古くはソクラテスが規定するように、プラトーンにおいてすでに、「美とは聴覚と視覚を通じて得られる快楽」であると述べられている (プラトーン 95-97)。すなわち、五つの感覚のうち、美と特権的に結びつけられたのは、聴覚と視覚であり、higher senses (高級感覚) と位置づけられ、触覚、嗅覚、味覚は伝統的に lower senses (低級感覚) として見なされてきた (谷川 191)。

アディソンも『スペクテイター』(No. 411) 誌上で「想像力の快楽」(“Pleasures of Imagination”) と題し、想像力のもたらす快について説く際に、視覚を特権的に扱い、“Our sight is the most perfect and most

delightful of all our senses.”と述べている(497)。視覚の特権化において重要なことは、視覚が対象を捉える際に、対象物と距離を取ることができるということである(谷川 198-99)。視覚的、聴覚的認識は、対象物とは、一定の距離を取ってなされるが、触覚、嗅覚、味覚は、認識の際に、身体的な快、不快とより強く結びつき、身体が強調されることになる。さらに味覚においては、そうした直接性によって、統御することが困難な大食いや不摂生へと容易に結びつく誘惑を秘めている。したがって、良い趣味とは、対象と適切な距離を取ることができること、すなわち、私的好みにも客観的距離を取ることができるということのうちに成立する。一方、味覚は、その直接的感覚において、距離が不在であることによって、統御不能な自己の身体との関わりを強め、趣味判断において排除されていくことになる。

さらに味覚については、リイ・ハントが、“Eating-Songs”と題した評論の中で、味覚の物理的距離の不在だけでなく、反芻するという意味における精神的距離の不在を指摘する。

We speak of them [pleasures of the dishes] with all the rapture and devotion of which prose is capable, but the prose is never moved enough to rise into song.

How is this?

We take the reason to be that the rapture is always prospective or simultaneous, but never looks back, and could not very well sing if it did. (*Criticism* 554)

ハントによれば、味覚は、食べ物を口に入れる間際の期待と食べる瞬間の快楽に基づくものであり、想像力における反省という、心理的距離に基づくものではないということになる。しかし、ハントは、続けて、“Every natural pleasure is to be respected. . .”と述べ、味覚に基づく快楽は、そこに人間的作為が持ち込まれないからこそ「自然である」と主張している(555)。ハントのこうした直截的、感覚的詩学は、内省することによって、詩を形式や節度へと抽象化させていくべきと説いた John Gibson Lockhartら保守派の論客達の精神的距離に基づく詩学とは対照をなす。実際ハントは、身体的感覚と感情に裏打ちされた詩こそ、「自然な」創造性を有することを掲げ、『エグザミネー』誌上で「円卓”(Round Table)”という評論を開始する際に、その評論の目的として、文学的趣味の話題に加え、味覚の快楽を謳うことを表明する。

[We] are, literally speaking, a small party of friends, who meet once a week at a Round Table to discuss the merits of a leg of mutton and of the subjects upon which we are to write. This we do without any sort of formality, letting the stream of conversation wander through any grounds it pleases. . . (*Examiner* 12)

文芸批評誌に掲載される「円卓」という評論のタイトルは、ハントやその親しい文人達による社交的な集まりが政治、芸術、文学などについての趣味談義の場となることを示唆している。しかし、そこでの話題としてまず、“the merits of a leg of mutton”として、羊の足の旨い点を俎上に載せると公言し、円卓が趣味を語る哲学的思索の場であるとともに、味覚の快楽を語るための饗宴の場でもあることを示唆している。すなわち、18世紀の、身体性を排除した礼儀正しく洗練された趣味の概念は、ロマン主義の時代になり、身体そのものによって得られる知覚の鮮烈さを強度として語る表現を模索する時代へと変容するともいえる。

II

キーツの詩は、ハントをして「甘美なものに終わりが無い」(“there is no end of the ‘nectared sweets’”)と言わしめたほど、感覚の悦楽を身体的メタファーによって表現する(Matthews 281)。キーツが特に味覚とその身体的表現に注視していたことは、John Miltonの*Paradise Lost*を読んで、自身の所有した本の欄外に記した書き込みを考察することによって明らかになる。

Milton in every instance pursues his imagination to the utmost—he is ‘sagacious of his Quarry’ he sees Beauty on the wing, pounces upon it and gorges it to the producing his essential verse. (Wittreich 559)

食らいつき、ががつと食べるという“pounce”や“gorge”という動詞に象徴されるように、キーツはミルトンの創造性を、嗅覚的に捕らえた美を飲み込み、消化し、そして詩を生み出すという、感覚と消化に見出すといえる。特に、味わい、生み出すための口という身体において達成される身体的詩作の行為に焦点が当たっているともいえる。そこでは食べ物を取るための口は、詩のヴィジョンを発するための精神性の発露の場というよりも、食べて消化するという身体的な創作行為の場として機能するといえる。「獲物を嗅覚で捉える」(“Sagacious of his quarry”)という語句は、そもそもミルトンの詩行からの引用で、『パラダイ

ス・ロスト』の第10巻において (PL 10.281), 「死の風味を味わう」 (“taste / The savor of death”) 「死」 (“Death”) が、餌食となる者の死臭を嗅ぎ取る場面からの引用である (PL 10.268-69)。キーツは、『パラダイス・ロスト』の中の「死」に与えられた嗅覚と味覚という卑俗ともいえる身体感覚をミルトンの強靱な創造性の中にこそ見出しているのである。

しかし、例えば、Edmund Burk にとっては、「賢明な判断力による曖昧さ」 (“judicious obscurity”) こそが『パラダイス・ロスト』における「死」を象徴するものであり、その抽象性において、sublime という崇高の念が喚起されると指摘している。

No person seems better to have understood the secret of heightening, or of setting terrible things, if I may use the expression, in their strongest light by the force of a judicious obscurity, than Milton. His description of Death in the second book is admirably studied; (59)

バークは、ミルトンの「死」が恐怖という感情を引き起こすが、それは、詩の言葉の曖昧さによって引き起こされる情動であることを述べている。すなわち、恐怖は、確かに読む者の内に喚起されるが、認識し難い曖昧さによって引き起こされる情動であり、キーツがミルトンに見出した直截な知覚感覚や食らい尽くしてしまう身体的動きとは異なるものである。バークは、崇高と美の概念を論じるにあたって、「趣味についての序論」 (“Introduction on Taste”) を述べ、taste に元来内包される気まぐれな傾向を統御する基準を定めるべきであると主張し、趣味としての taste に味覚としての感覚よりも、やはり判断力を見出そうとしている (12)。すなわち、バークによるミルトンの評価と比較しても、キーツが評価するミルトンの趣味はいかに感覚に比重を置いた特異な創造性であったか、そしてそれが、言語によって昇華され美学化された崇高さとは一線を画するものであったかを知ることになる。

こうしたキーツのミルトンに対する評価は、ハズリットによるミルトンの評価に負うところが大きい。ハズリットは、taste という英語ではなく、もともとイタリアやスペインからフランスを経由して趣味概念が広まったことを象徴する語である gusto という語によって、ミルトンの創造性を述べている。

Milton has great gusto. He repeats his blows twice; grapples with and exhausts his subject. His imagination has a double relish of its objects, an inveterate attachment to the things he describes, and to the words describing them. (79-80)

ハズリットは、“gusto” を “power or passion defining any object” と定義し、強い感情を喚起する力や情熱によって、芸術を評価しようとする (77)。“Gusto” という語が taste と同じく「趣味」と訳せるとしても、“gusto” には明らかに、味覚や他の感覚すべての親和性によって成り立つ身体的衝動によって喚起される強い感情に眼目が置かれる。詩の主題に「一撃」を加え、「掴みかかり」 (“grapple”), 空になるまで「骨抜きにする」 (“exhaust”) といった身体的動きに基づくミルトンの創造性は、最後には、詩作の対象を「二度におよんで味わい」 (“a double relish”) 尽くすという味覚にこそ存在する。したがって、gusto の詩人としてミルトンを評価したハズリットやキーツの詩における taste は、美学的、言語的趣味には収まりきらない、食べるという直截な身体感覚を追求していたともいえる。興味深いことに、キーツが精読したミルトンの『パラダイス・ロスト』の第五巻には多くの下線が引かれているが、まさに、「天使」と「人間」が共有する食事について語られる場面がある。ここでは、イブが「真実の食欲」を満たすための食事を供する。

And Eve within, due at her hour, prepared
For dinner savory fruits of taste to please
True appetite and not disrelish thirst
Of nectarous draughts between from milky stream,
Berry or grape. (PL 5.303-07)

「真実の食欲」のために用意された人間の食べ物、ラファエロは「真実の空腹」 (“real hunger”) によって、美味しそうに食べることになる (PL 5.437; Gigante 141-42)。ここでは、食べることにまつわる食欲や飢餓感、排除すべき卑俗な身体性ではなく、ラファエロが述べるように、食べたものを、「味わい、混ぜ合わせ、消化し、吸収して、肉体的なものを霊的なものへと変えていく」 (“Tasting concoct, digest, assimilate, / And corporeal to incorporeal turn.”) 際の、地上から天上への昇華の過程の基部に存在する (PL 5.412-13)。したがって、生み出される霊的なヴィジョンは、霧や霞のように天上に漂っている訳ではなく、食べて消化するという人間の身体に宿ることになるといえる。

キーツは、この食事をめぐる昇華／消化と創造性の密接な関係を、*The Fall of Hyperion: A Dream* にお

いて再現する。

Before its wreathed doorway, on a mound
Of moss, was spread a feast of summer fruits,
Which, nearer seen, seem'd refuse of a meal
By angel tasted, or our mother Eve;
For empty shells were scattered on the grass,
And grape stalks but half bare, and remnants more,
Sweet smelling, whose pure kinds I could not know.
.....

And appetite

More yearning than on earth I ever felt
Growing within, I ate deliciously; (1.28-34, 38-40)

ミルトンという偉大な詩人の叙事詩における食卓と大きく異なることは、キーツの饗宴が、天使、もしくはイブの食べた物の「残骸」(“remnants”)であることであり、ミルトン以後の後代の詩人が挑まなければならなかった地上での試練を象徴しているともいえる。しかし、共通する重要な点は、詩人が、地上においてかつて感じたことのないほどの飢餓感をもって、美味しく食べたという食べる行為と身体的な欲望である。この食事によって詩人が通過すべき過程は、ラファエロが説いたように、「身体的な」ものを、いかに「非物質的な」ものに昇華／消化していくかである。それは、Monetaによって発せられる、真の詩人であるのか、単なる夢想者であるのかを判断すべき問いによっても突きつけられる課題である。地上の現実を知るためには、霧や霞を食べる、創られた礼儀正しい身体を持った夢想家ではなく、飢餓感から食べ物を食べ、消化するという身体的な欲望や快楽を、詩のヴィジョンへと昇華させるための現実の身体を哲学する詩人である必要がある。

『ハイペリオンの没落』の創作に至るまでに、キーツの詩は、食べる身体や味覚のイメージにおいて大きな変化を経る。まず味覚的イメージが比較的少ない初期の詩である *Sleep and Poetry* では、異教の女神や牧神の世界を詩にすることが、「赤い林檎と苺」を食べる行為になぞらえられる。

O for ten years, that I may overwhelm
Myself in poesy; so I may do the deed
That my own soul has to itself decreed.
Then will I pass the countries that I see
In long perspective, and continually
Taste their pure fountains. First the realm I'll pass
Of Flora, and old Pan: sleep in the grass,
Feed upon apples red, and strawberries,
And choose each pleasure that my fancy sees; (96-104)

「遠くに見る国々」で味わう「清い泉」は、詩人としての創造力を涵養するために渉獵すべきさまざまな偉大な詩や書物を喩えている。そしてまずは神話の世界を味わうために、「赤い林檎と苺」を食べるという味覚の快楽に身をゆだねることが歌われる。

そして物語詩 *Endymion* において、古代ギリシア・ローマの神々の物語は、エンディミオンが味わう豪華な食べ物をもたらす快楽によって再現される。

For 'tis the nicest touch of human honour,
When some ethereal and high-favouring donor
Presents immortal bowers to mortal sense;
.....
Here is wine,
Alive with sparkles—never, I aver,
Since Ariadne was a vintager,
So cool a purple: taste these juicy pears,
Sent me by sad Vertumnus, when his fears

Were high about Pomona: here is cream,
 Deepening to richness from a snowy gleam;
 Sweeter than that nurse Amalthea skimm'd
 For the boy Jupiter: and here, undimm'd
 By any touch, a bunch of blooming plums
 Ready to melt between an infant's gums:
 And here is manna pick'd from Syrian trees,
 In starlight, by the three Hesperides. (II. 436-38, 441-453)

エンディミオンは、泡立つ、冷やした葡萄酒、梨の果汁、雪のように輝く滋味に富むクリーム、熟れたすもも、シリアからもたらされたマナを味わうことによって、アリアドネとバッカス、ポモナとウェルトウムヌス、ジュピターとその乳母アマルティア、ヘスペリデスの神話をまさに「味わう」ことになる。

このように嗜好品としての贅沢な食べ物を味わうことによって得られる快樂が、ギリシア・ローマ神話の数々を味わい尽くしていくことに喩えられている。しかし、『眠りと詩』においてキーツも自覚するように、「花の女神」(“Flora”)と「古代の牧羊神」(“old Pan”)の世界に別れを告げ、「人間の心の苦しみや困難」“the agonies, the strife / Of human hearts” (124-25)へと向かうための詩を書くために、味覚の快樂はやがて、食べて、それをどのように消化し、身体的、実体的な人間性に到達するかということにおいて模索されることとなる。詩作は、「私の彷徨う精神は、もうこれ以上飛翔してはならない」“My wand'ring spirit must no further soar.—” (*I stood tip-toe* 242)と歌われるように、「飛翔」という昇華への方向にベクトルが向けられるのではなく、食べて、消化するという形而下の人間性へと向けられる。確かに、キーツの初期の詩の中の豪華な食べ物は、実際には口にされず、鑑賞するために眼前に並べられただけであるともいえるが、『ハイペリオンの没落』では、食べ物は確かに口にされ、飲み下されることになる。

And, after not long, thirsted, for thereby
 Stood a cool vessel of transparent juice,
 Sipp'd by the wander'd bee, the which I took,
 And, pledging all the mortals of the world,
 And all the dead whose names are in our lips,
 Drank. That full draught is parent of my theme. (1.41-46)

「透明な果汁」を飲み干すことが、詩人の詩の主題となると歌われるように、味わい、消化することが主題となる。当時の商業主義の台頭によって、奢侈や富を象徴する贅沢な食べ物の視覚的イメージは、美食の快樂や、豊穡と生命力の賛歌として捉えることも可能である。しかし、食べ物は、口にされ、喉を通り、身体において消化されることによって現実的な身体性を差し出し、さらに、消化不良によって痛み、身体を損なう不快さを呈示することになる。すなわち、身体性を排除した節度ある規範を逸脱する、不可避の消化する身体を表出させることによって、詩は人間性のヴィジョンを獲得するともいえる。

したがって、果汁を飲んだ詩人は、その消化するというこの意味を具体的に描き出す。

--when suddenly a palsied chill
 Struck from the paved level up my limbs,
 And was ascending quick to put cold grasp
 Upon those streams that pulse beside the throat:
 I shriek'd; and the sharp anguish of my shriek
 Stung my own ears—I strove hard to escape
 The numbness; strove to gain in the lowest step.
 Slow, heavy, deadly was my pace: the cold
 Grew stifling, suffocating, at the heart;
 And when I clasp'd my hands I flet them not. (*The Fall* 1.122-31)

「麻痺を誘うような悪寒」が、四肢と喉元で脈打つ血管に兆し、心臓に達するほどの冷気に襲われるという、具象的かつ、解剖学的描写によって、味覚という感覚が身体を通して、最終的に人間性のヴィジョンを呈示することになる。しかし、モネタによって、人間の存在について単に夢想するだけに終わる者は、「おまえは夢想家で、自分の熱に病んでいる。地上を思え」(“Thou art a dreaming thing; / A fever of thyself—

think of the earth;”)と諭される (*The Fall* 1.168-69)。食べ物を味わい、消化する人間が感じる痛みや熱が、ただ自分自身のものである限りは夢想家にすぎないことになる。しかし、身を焦がす「自らの熱」は、“sickness not ignoble”という人間全ての存在が担う「卑しからざる」病であり、消化する身体につきまとうものとして、人間性を追求するために担わざるを得ない (1.184)。この身体の熱と痛みは、『ハイペリオン』においてタイタン族の痛みと熱として描写される。

Dungeon'd in opaque element, to keep
Their clenched teeth still clench'd, and all their limbs
Lock'd up like veins of metal, cramp't and screw'd;
Without a motion, save of their big hearts
Heaving in pain, and horribly convuls'd

With sanguine feverous boiling gurge of pulse. (*Hyperion* 2.23-28)

痛み悶えるタイタン族は、折り曲げられ、縮こまり、ねじ曲げられ、不自然に固まった身体によってその醜状をさらす。すなわち『ハイペリオンの没落』は、詩人が「透明な果汁」を飲み、自分自身の痛みを経験した後に、モネタの脳に刻まれた、このタイタン族の悲哀と、それを宿すモネタ自身の痛みを味わうことによって、人間性の悲哀の歴史と他者の痛みを「味わう」物語であるといえる。

こうした味覚という知覚と、そこから表現という言葉へと繋ぐ身体との関係は、興味深いことに、当時明らかになっていった医科学とその革新的な身体論と密接な関係がある。キーツが通ったガイ病院 (Guy's Hospital) での生理学の授業は、当時有名な解剖学者であり生理学の権威でもあった Astley Cooper によるもので、キーツ自身がその授業についてまとめたノートが残っている。

Physiology of the Nervous System. The 1st office is that of Sensation—it is an impression made on the Extremities of the Nerves conveyed to the Brain. . . . M^rC [Astley Cooper] believes that y^e Nerves support the organization of the Body, but do not directly afford it nourishment. Volition is the contrary of Sensation it proceeds from the internal to external parts. . . . M^rC believes that the powers of parts are supported neither by y^e Brain nor the M. S. [spinal marrow] but by their particular Nerves. Sympathy. By this the Vital Principle is chiefly supported. (*JKNB* 55-6; emphasis in original)

味覚といったような「感覚」(“sensation”)は、神経によって脳へと伝達される。そして、脳から「意志の作用」(“Volition”), これは言葉を発する力といえるが、これによって身体の内から外に向けて言葉が発せられる。こうした神経と脳の働きによって、外界からの刺激による知覚が言葉となって発せられる身体的作用を「呼応」(“sympathy”)と呼んでいる。これは、外界と接した身体の各々の部分が、神経によって共鳴し、そこから脳を経て最終的に言葉が生じるという調和に基づく身体観である。非常に身体を意識し、最新の医科学の知識に触れた詩人であったからこそ、キーツの詩は、身体性を排除した趣味に基づく詩が、判断力という名の下に、階級や党派、出自を問うといった排他性を保持していたことに対抗し、現実の身体と言葉の融合によって生まれる詩を取って呈示したともいえる。こうしたキーツの詩において、身体内部で消化された言葉には、美学的概念においても、医科学的概念においても近代的な革新性を孕んでいたと考えられる。

興味深いことに、キーツは、友人 C. W. Dilke に宛てた手紙の中で、詩作によって富を得て、快樂を味わえるような生活を送りたいと書いたところで、「快樂」という言葉から、taste について次のように述べる。

Talking of Pleasure, this moment, I was writing with one hand, and with the other holding to my Mouth a Nectarine—good god how fine—It went down soft pulpy, slushy, oozy—all its delicious embonpoint melted down my throat like a large beautiful Strawberry. (*Letters* 2: 179)

快樂は、手紙を書いている詩人の身体そのものである「手」や、「口」を経て、「喉」を通るネクタリンの具象的、身体的な味覚によって表現され、消化／昇華され、最後に、至福の苺という物質として、突如差し出される。キーツの詩において、ネクタリンは、詩的に昇華されたとしても、天上の食べ物に生まれ変わることはなく、地上の食べ物である、至福の苺に生まれ変わる。すなわち詩における快樂は、「喉」を下る、「柔らかく、とろっとして、果汁がしみ出して」いく身体的感覚から発せられ、喉元に残滓として残る「美味しくふくらんだ実」は、物質であり、美でもある苺として生まれ変わる。

このように味覚の詩人キーツにとって、趣味という洗練された詩の創作が美学的規範だとみなされた時代

に、敢えて味覚の身体性を唱えることは、身体という在り方がより現実の人間の感情を想起する場であることを表明することであったと考えられる。“Ode on Melancholy”の最後の連において歌われるように、「力強い舌」で「歓びの葡萄」を「繊細な口蓋」で押しつぶせる者のみが、憂鬱の女神の祠を眼にすることができるが、そうすることによって憂鬱の力が持つ悲しみを taste 「味わう」 (“His soul shall taste the sadness of her might”) ことになり、女神の神殿に掲げられることになる (29)。すなわち、taste することとは、精神だけでなく、身体に刻まれる哀感を味わうことだったと考えられる。趣味としての taste が、身体性を排除し、低級感覚を退けたとすれば、キーツの詩は、敢えて物質の身体的な世界としての現実を感覚を通して表現しようとしたと考えられ、身体の詩学ともいうべき革新性を内包していたといえる。

*本稿は2018年10月20日に開催された日本英文学会九州支部第71回大会（於九州女子大学）でのシンポジウム「詩と革新」において口頭発表した原稿を加筆修正したものである。また、本論考は2017年度～2019年度JSPS科学研究費補助金（基盤研究C）「イギリス・ロマン主義文学における『身体性』のレトリックと革新性」（17K02502）によって遂行した研究の一部である。日本学術振興会からの研究助成に感謝申し上げます。

Works Cited

- Addison, Joseph. *The Spectator: A New Edition with Biographical Notices of the Contributors*. Cincinnati, 1853.
- Burke, Edmund. *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*. Edited by J. T. Boulton, Routledge and Kegan Paul, 1958.
- Eagleton, Terry. *The Ideology of the Aesthetic*. Blackwell, 1990.
- Gigante, Denis. *Taste: A Literary History*. Yale UP, 2005.
- Graham-Campbell, Angus. “‘O for a Draught of Vintage’: Keats, Food and Wine.” *Keats-Shelley Review*, vol. 17, 2003, pp. 42-60.
- Hazlitt, William. *The Complete Works of William Hazlitt*. Edited by P. P. Howe. Vol. 4, J. M. Dent and sons, 1930.
- Hume, David. “Of the Standard of Taste.” *The Taste Culture Reader: Experiencing Food and Drink*, edited by Carolyn Korsmeyer. Berg, 2005, pp. 197-208.
- Hunt, Leigh. *The Examiner, A Sunday Paper, on Politics, Domestic Economy, and Theatricals, for the Year 1815*. London, 1815.
- . *Literary Criticism*. Edited by Lawrence Huston Houtchens and Carolyn Washburn Houtchens. Columbia UP, 1956.
- Keats, John. *John Keats’s Anatomical and Physiological Note Book*. Edited by Maurice Buxton Forman. Haskell House Publishers, 1970.
- . *The Letters of John Keats: 1814-1821*. Edited by H. E. Rollins. Harvard UP, 1958. 2vols.
- . *The Poems of John Keats*. Edited by Jack Stillinger. Harvard UP, 1978.
- Kelley, Theresa M. “Keats and ‘Ekphrasis’: Poetry and the Description of Art.” *The Cambridge Companion to Keats*, edited by Susan J. Wolfson, Cambridge UP, 2001, pp. 170-85.
- Matthews, G. M. *Keats: The Critical Heritage*. Routledge & Kegan Paul, 1971.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Edited by Gordon Teskey. W. W. Norton, 2005.
- Rejack, Brian. “Blackwood’s Magazine and the ‘Schooling’ of Taste.” *European Romantic Review*, vol. 24, no. 6, 2013, pp. 723-42.
- Review of William Hazlitt, *Political Essays*. *The Monthly Review* 1815, pp. 250-58.
- Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper, third earl of. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*. Edited by Lawrence E. Klein, Cambridge UP, 1999.
- Wittreich, Joseph Anthony. *The Romantics on Milton: Formal Essays and Critical Asides*. P of Case Western Reserve U. 1970.
- Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. Edited by R. L. Brett and A. R.

Jones, Routledge, 1991.

谷川 渥, 「味覚の不幸 美学の逆説をめぐる覚え書き」。『現代思想』第16巻, 11号, 1988年, 191ページ~201ページ。

プラトーン, 『ヒippias (大)』。プラトーン著作集 第五巻「言葉とアイデア」水崎博明著, 権歌書房, 2013年。

